

〈県立川崎図書館から〉

## 県立川崎図書館の移転・再開館について

古根村 政義

平成 30 年 5 月 15 日、当神奈川県立川崎図書館（以下「当館」）は、長年親しまれてきた川崎市川崎区富士見から同じ市内の高津区坂戸にある「かながわサイエンスパーク」（以下「KSP」）内に移転・再開館しました。この移転によって、当館がどのように変わったのかご紹介します。

### はじめに

平成 30 年 3 月 31 日（土）は、利用者や移転関係の業者からの問い合わせに対応するために私は移転前の図書館で最後の電話番をしていました。午後 5 時過ぎに戸締まりを確認するため、館内を巡回すると、2 年前に着任した際には、資料で満ちていた書架がすべて空になっていました。いろいろなことがありましたが、ついにこの地を離れることを実感しました。



移転を果たした旧図書館の書庫

### 県立川崎図書館の概要

工業専門図書館としての性格を有する当館は、2 番目の県立図書館として昭和 34 年 1 月に川崎市川崎区富士見の地に開館しました（以下「旧図書館」）。当時は、まだ市内には市立図書館が十分に整備されていなかったため、技術開発等を支援する県立図書館としての機能のほかに、地域住民を対象とした地域図書館の機能も果たしていました。しかし、平成 7 年に川崎駅近くに川崎市立川崎図書館が開館したことにより、地域図書館としての機能を縮

小し、科学・産業技術系の専門性の高い「課題解決型のリサーチライブラリー」へと機能展開を図り、「科学と産業の情報ライブラリー」としてリニューアルしました。

また当館は、昭和 42 年に書庫の増築などを行って以来、大きな改築は行っておりませんので、エレベータはなく、開館から 60 年を経て、施設の老朽化が進み、雨漏りもするなど、利用者の方々にはご不便をおかけしてしまいました。しかし、現地での建替えは都市公園区域内に立地していることや、川崎市の富士見周辺地区の整備計画、難しい状況にありました。

### 神奈川県の「緊急財政対策」と移転後の図書館のコンセプト（目指すべき図書館像）

県財政再建のために平成 24 年 10 月に発表された「緊急財政対策」において、当館については県立図書館と生涯学習情報センターとの「機能の純化・集約化を含めた検討」という方向性が出されました。その後、県民との意見交換会や市町村立図書館との見直し検討会等の場で存続を望む県民・利用者からの意見や市町村・世論からの要望を受け、更なる検討が行われました。

こうした状況から、平成 25 年 2 月の県議会において「企業活動の支援につながる機能に高度化・特化して、川崎市内に残す方向で検討」することを教育長が答弁しました。更に、12 月の県議会において、「溝の口にある KSP が総合的に見て、適地であるとの判断に至った。」との答弁が知事からなされました。これらの答弁や、市内での産業情報機能の存続という川崎市の意向も踏まえ、移転先については、川崎市高津区坂戸に所在する KSP とし、当館の強みを活かした企業活動の支援につながる機能に特化することとなりました。

### KSP における図書館の入居場所の検討

当館が入居した KSP は都市型サイエンスパークであり、誰でも入ることができる西棟と、入居者等の関係者しか立ち入ることができない R&D 棟と東棟の 3 棟の建物からなります。移転にあたり、十分な保管機能を有し、また、利用者に便の良い閲覧室が設けられる場所を検討した結果、最終的に閲覧室

を西棟2階に、書庫をR&D棟2階に設けることとしました。

西棟の閲覧室には、利用者に圧迫感を与えない書架の高さと車椅子の利用者が自由に書架間を移動できること、R&D棟には書庫スペースの他に事務スペースをとるためのレイアウトを設計し、最終的に、KSPでは閲覧室と書庫を合わせて、約2,500㎡の場所を確保しました。

## 企業活動の支援につながる高度で特化した機能の検討

企業活動の支援につながる機能として、どのようなサービスを提供するかについて検討したところ、2つの大きな課題が見つかりました。1つ目は、企業が求めるものづくり情報とは何かということについて、2つ目は、旧図書館1階で提供していたものづくり技術関連資料以外の資料の取り扱いについてです。

### (1) 企業が求めるものづくり情報

資料については神奈川県立図書館（横浜市西区紅葉ヶ丘）と当館とで分担収集していますが、当館の分担である科学技術分野の先端技術に関する情報については紙媒体から電子媒体への移行が他の分野よりも顕著であり、特に、ものづくり技術に関する情報ではその動きが速まっています。ことに、電気・電子分野の学会誌の約95%は印刷物としては発行されないポーンデジタルのものになっているといわれています。

そこで、ビジネスパーソンを含むものづくりに関わる技術者や研究者が必要としている情報にはどのようなものがあるのかを、日頃からカウンターで利用者に接している職員や、来館利用者、先端技術見本市の来場者や神奈川県資料室研究会（以下「神資研」）の会員にアンケート調査を行いました。

アンケートには、社会人になって使えなくなったので困っている等の、個人では導入の難しい電子ジャーナルの導入への期待が多くありました。

### (2) ものづくり技術関連資料以外の資料

ビジネスパーソン向けのビジネス書、地域資料、やさしい科学コーナーに配架してあった社会科学や芸術分野等のものづくり技術関連資料以外の資料は、他の図書館へ移管する方向で選別することとしました。

そして移転・再開館にあたっては、これまでの閲覧・貸出・レファレンスサービス等の事業を継続しつつ、ものづくり技術関連資料の充実を図り、各種事業を展開していく、「ものづくり技術を支える」機能に特化した専門的図書館として全国的にも例の

ない特色ある図書館を目指すこととなりました。

当館は、移転後の機能として

- ・製造業等の「ものづくり技術」の高度化や、技術開発をバックアップ
- ・知的財産に関する支援、知的財産関連業務の（地独）神奈川県立産業技術総合研究所（KISTEC）等との連携
- ・ものづくりに役立つ電子ジャーナル、データベース等の先進的情報の発信の3つの柱を掲げました。

## 5つの機能について

3つの柱を実現するために、閲覧室には5つの機能を整備しました。

- 1 Research（調査）**  
ものづくり技術を支える専門書や社史、特許・規格、技報・学会誌などの科学技術資料と電子ジャーナル・外部データベースの提供
- 2 Liaison（議論）**  
弁理士・中小企業診断士等の専門家による知財相談・経営相談とグループ討議の環境
- 3 Conference（交流）**  
ものづくりに関心のある方の異分野・異業種の交流拠点と、ものづくりに関する講座など多様なイベントの開催
- 4 Study（考究）**  
図書館司書の専門的なレファレンスサービスにより求める情報の入手をサポートし、調査・研究に集中できる閲覧席とWi-Fiによるインターネット接続環境
- 5 Inspiration（発想・価値創造）**  
ものづくりに役立つ入門書・新書・漫画などをリラックスして眺めることで、新たな発想やひらめきが生まれ、価値創造へとつながるゆったりとくつろげる空間



新図書館のレイアウト

## 移転の準備

さて、平成 28 年に着任した際には、KSP へ移転することと新図書館の性格は決まっていたが、平成 29 年度末とされた移転の詳細なスケジュールは未策定でした。

本格的に移転準備が動き出したのは、平成 28 年 8 月からで、KSP の入居契約や改装工事、資料の移転、新規サービスの導入等、様々な手続きと作業を進めていきました。

資料の移転作業としては、移転する資料を大きく 3 つのグループに分けました。(1) KSP に移転するもの、(2) 外部に保管するもの、(3) 当館ではない他の図書館等で活用するものの 3 グループです。そして、平成 28 年 12 月からは、グループごとの移転場所への移動準備作業を開始し、平成 29 年 5 月にはそれぞれの分量を確定し、KSP での書架配置や、資料配架位置等の設計作業を進めました。

併せて、新規サービスとして導入する電子ジャーナル、データベース等については、神資研会員や工業分野の大学が導入しているタイトルを調査し、公共図書館である当館が採用すべき候補をリストアップしました。その後、提供各社に連絡し、契約の可否と導入価格の交渉を進めました。

## 新図書館の開館

平成 30 年 4 月 1 日、当館は、KSP 西棟 2 階及び R&D 棟 2 階に移転し、5 月 14 日に、知事及び多くの来賓を迎えリニューアルオープンを記念する式典・内覧会を挙行、翌 15 日から再開館しました。

以下、移転後の図書館について記述します。

## 施設について

閲覧室は一般の人が出入り自由な西棟のエントランスから、エスカレータやエレベータを利用して入館できる 2 階に、スペースを確保することができました。また、閲覧室内は体の不自由な方の障害となるような段差もなく、どなたでも利用しやすいバリアフリーの施設となりました。

この 2 階のスペースでは、旧図書館で 3 フロアに分けて配置していた閲覧室を 1 フロアで展開することができました。

当館は調査研究目的で来館される利用者の多くが、ご自分のパソコンを持ち込んで使用されていることから、電源コンセントが付いている閲覧席を 46 席用意しました。その他の座席も含めて、閲覧のための座席は最大 140 席あります。また、調査研究に集中できるように落ち着いた内装と家具を配置し、居心地の良い空間を創りました。

そして、利用者用インターネットと外部データベースの扱いについては見直しを行いました。館内

で利用者の方が自分の書齋に居るようにして調査研究できるよう Wi-Fi によるインターネット接続環境を提供し、旧図書館で、インターネット検索用に供していたパソコンは電子ジャーナル・外部データベース用に供することとし、15 台用意しました。さらに、当館で受入れている学会誌が徐々に電子ジャーナル化している状況に対応するため、ID/PASSWORD の入力のない IP 認証による接続方式を導入しました。

そのほか当館では、新たに少人数のグループで議論ができる「ディスカッションルーム」を設けました。当館の所蔵資料を使うことが前提ですが、8 人までの会合ができます。

## 運営体制について

移転に合わせて運営体制を見直し、事業部門はそれまでの 3 課体制からサービスを担当する課と資料整備を担当する課の 2 課へと組織を再編しました。事業部門の職員は常勤 10 名、臨時司書 5 名、再任用 1 名、非常勤司書 15 名の計 31 名で、管理課と連携して図書館運営を行っています。

当館の主な対象としている技術者・研究者やビジネスパーソンが主に平日に業務を行っていることから、開館日については、月曜日から土曜日までとし、日曜日を休館としました。開館時間は、30 分繰り下げて平日は 9 時 30 分から 19 時 30 分まで、土・祝休日は 17 時 30 分までに変更しました。

## 資料について

旧図書館にあった 43 万冊相当の資料を 3 グループに分けました。まず、(1) 当館の「ものづくり技術を支える」機能に最も必要な情報を収録している資料は、技術調査や研究開発に役立つ学会誌・講演論文集・技術報告書等の約 8,700 タイトルであると考え、旧図書館にあった雑誌はすべて KSP 書庫に收容することとしました。また、ものづくり技術の調査に役立つ基本的なものと新しい情報を提供で



旧図書館 1 階に並んだ移転資料

きる図書を加えた約 28 万冊（換算後）を KSP に、(2) 相模原市内に設けた外部書庫には図書約 13 万冊を移すこととしました。さらに、(3) (1) 及び (2) 以外の資料のうち約 5 千冊は、横浜市西区の県立図書館と川崎市立の図書館等の市町村図書館で活用していただくため、移管ないしは譲渡しました。

なお、相模原市内の外部書庫に保管している図書は、午前中に予約すれば、当日の午後 4 時以降に受け取れる仕組みを構築し、利用者の利便性を確保しました。

KSP に移転した資料約 28 万冊のうち、閲覧室に図書約 7 万冊と雑誌の最新号の一部、書庫に図書 1 万冊と雑誌 20 万冊相当を保管し利用に供しています。

閲覧室に配架している図書には、IC タグを貼付し、貸出・返却や資料点検等の蔵書管理に活用しています。

当館の図書資料は従来から大きく 5 つのグループに分けられています。社史、規格・特許、専門書、コンピュータ・情報クラスタと入門書です。移転にあたって、これまで別置していた和・洋書と参考図書を混配するといった配架方法の変更も行いました。また、コンピュータ・情報クラスタは、NDC 分類の図書ラベルを装備していますが、補助記号として A：情報科学、B：コンピュータ・システム、C：プログラミング、D：データベースその他の各テーマを設定し、テーマ別に配架しています。

雑誌は、継続受け入れをしている約 2,000 タイトルの中から、よく利用される約 1,000 タイトルの最新号を閲覧室で公開配架しています。これらの雑誌は、他の公共図書館での所蔵が少ないものが多く、まとめたの閲覧やコピーのためによく利用されています。

## 新たな機能について (1) 電子ジャーナル

資料面で今回の移転での最大の特色は、公共図書館では全国で初めて IEEE Xplore と Scopus という電子ジャーナルのポータルサイトを導入し、最先端の学術情報が提供できるようになったことです。電子ジャーナルは学会誌等のデジタル化に伴い、専門的な技術情報を利用するために欠かせないツールになってきています。

同じ公共図書館である県立の図書館と市町村立図書館の役割分担を踏まえ、県民に必要とされているが、市町村立図書館では提供できない資料を提供することが県立の図書館の役割として重要だと考えました。当館ではこれまで収集・蓄積してきた技術・工学系の専門資料、特許・規格関係の資料の延長線上にある資料として、新たに「ものづくり技術」を支える最先端情報に誰でも容易にアクセスすること

ができる電子ジャーナルの提供を始めることとしました。

電子ジャーナルを導入するにあたって、導入に要する費用や収録している情報量が多く利用しやすいことと、ものづくり技術を支えるという当館の機能に適うものであることを念頭に、事前の利用者アンケート等を参考にして検討しました。査読を受けた様々な学術誌の抄録・引用文献を 7,000 万件以上（その中にはオープンアクセス (OA) になっていて本文まで利用できる文献を含む。）収録している Elsevier 社の Scopus と、人工知能 (AI) や IoT (Internet of Things)、ロボット等の分野に関する文献を収録している IEEE のコンテンツを導入することとしました。IEEE は米国の公共図書館への導入実績があり、導入の基準が整備されていたため、比較的容易に交渉が進みました。まずは、来館者が誰でも館内で利用できることと検索結果を印刷 (複写) することができる、この 2 つのコンテンツから始め、利用者の反応をみることにしています。今後、利用促進の広報を強化するとともに、利用者のニーズや専門家の意見を参考に、コンテンツの見直しも含めて検討していく必要があると考えています。

## 新たな機能について (2) 各種団体との連携

専門的図書館として当館が所蔵する資料群を活用し、図書館の機能をさらに広げていくため、各種団体との連携事業を新たに実施しています。

これまで、神資研、一般社団法人神奈川県発明協会、公益社団法人けいしん神奈川、そして、蔵前理科教室ふしぎ不思議 (くらりか) と連携して、それぞれ職員研修、発明相談、創業・経営相談、科学普及事業を行ってきました。移転後はこれらの事業の充実に加えて、新たに日本弁理士会関東支部神奈川委員会や特定非営利活動法人 NPO ブルーアース等と連携し、知的財産相談、科学普及事業等を行うこととしました。また、神奈川県立産業技術総合研究所やハード面とソフト面の起業支援者としての機能を有する株式会社ケイエスピーと当館の三者で行う新たな連携事業について、検討を進め、ものづくり技術を支える企業や産業団体等との連携・協力関係を構築しています。さらに、神奈川県立産業技術短期大学校や県立職業技術校等の教育機関との連携・協力も進めています。

## 展示・講演会について

ものづくりに関する展示を行うとともに、関連した講演会も開催しています。昨年 5 月の開館時には高津区に移転したことを周知する意味も込めて「高津区のものづくり」をテーマに、9 月からは「人と

ロボットの調和」をテーマに展示と講演会を行いました。「人とロボットの調和」では、川崎市内で行われた「かわさきロボット競技大会」に出場したロボットや、神奈川県が推進しているさがみロボット産業特区で生まれたロボットを展示しました。



ものづくりギャラリーにおける展示

また、移転前から児童向けの科学実験教室を開催してきましたが、これに加え、移転後の新たな取り組みとして、成人向けの「大人の理科教室」を始めました。これは、人生100歳時代を迎え、科学や技術の学び直しの機会にさせていただくもので、第1弾として10月には自然光、蛍光灯、LEDの光の成分を分析する「光を分解してみよう」を行いました。社史を活用した講座としては、これまでの社史編纂担当者向けの講座に加えて、9月には一般向けの「講演会・企業の足跡を知る」を立ち上げ、第1回目として「東洋製罐グループ創立者の足跡と容器を知る」を開催しました。



カンファレンスルームにおける講演会

## 今後の取組みについて

移転開館から9か月が過ぎ、移転前との利用状況の変化が明らかになってきました。例えば、入館者数、貸出冊数、レファレンス件数などが移転前と比べて、少なくなっています。移転前後で、施設規模や立地条件が異なっているため単純な比較はできませんが、今後、利用状況の分析を進め、利用者の拡大に向けた取組みを行っていく必要があります。

今年度の6月と11月に移転後の利用状況を確認するために利用者アンケートを行いました。旧図書館時代からの利用者は約3割に留まり、現在の利用者の約7割は移転後の新たな利用者であることがわかりました。利用目的等については旧図書館時代と大きな違いはみられず、引き続き調査研究のために利用されていることがうかがえました。

旧図書館は周辺にコンサートホールや体育館、球技場などの娯楽施設が数多くあり、気軽に立ち寄っていただける施設でしたが、新図書館は研究開発と企業のスタートアップを支援するイノベーション施設であるKSPの中にあります。そのため、明確な調査研究目的を持った来館者が多く見込まれますが、一方で、一般の利用者には近寄りにくい印象を持たれている可能性があります。今後は、旧図書館時代の親しみやすさを継承し、さらなるPRに努め、限られた人が利用する図書館ではなく、誰でもが気軽に利用でき、入門レベルからのものづくり情報が入手できる専門的ではあるが、身近で頼りになる図書館を目指したいと考えています。

---

こねむら・まさよし  
(神奈川県立川崎図書館 事業部長)